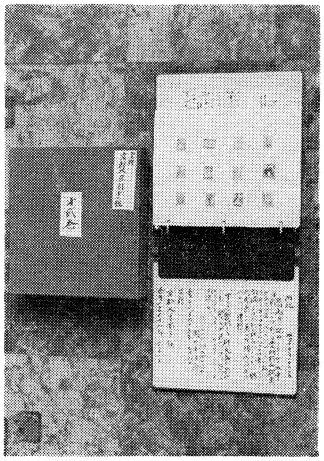
私が10年間勤務した文学部図書室での主に整理面での体験を考えてみると，はやい話が，年間何千冊かの漢籍が受入れされてくるが，漢文の読解力がなかったら，いかに適確な整理技術をもっていたとしても，どうして図書の目録を作り，分類をすることができようか。草書や変体仮名が読めなくては—日本の古書について，またしかり。和漢書以外では世界各国語のものが受入れられてくるのに，アラビア・ペルシヤ語などになると，めったに教授してくれる機関もない。

さらにもっと基本的に考えてみると，利用のために整理するわけであるが，利用者の立場に対する理解を欠いては，これは全然ナンセンス—というのが理の当然であろう。したがって学問についての大略の知識を有することは大学図書館職員にとって不可欠の前提条件といえる。私は文学部の経験しか有しないので，他部局の図書室については同日に論ずるつもりはないが，この基本的な考えについては誤っていないと思う。

今や大学図書館職員養成制度の確立は時を失することのできぬものとなっている。本年はじめて文部省は国立大学図書館の中堅職員を対象に，人文・社会系　10名，数学・物理系　10名，化学・生物系　10名とわけて，8月初めに3週間の再教育を行なうとのことであるが—これは従来の「大学図書館員講習会」の4日間よりは画期的に長期ではあるが—3週間位で私の上述したような欠陥が克復できるだろうかと危ぐをもっている。簡便な法として，業務上必要を認められた者は学部の関係授業を聴講できるようなシステムもあると思うが，大学改革の波が高まっている折柄，この制度のこともぜひ洩らさぬよう考えていただきたい。

（附属図書館　書庫掛）

在米邦人園田平次郎氏より秘蔵の切手コレクションと図書館学関係図書寄贈される



「前略　貴校盛栄敬賀の至りに御座います。小生幸ひ余世をアメリカに送っております。御休心。突然の申出であります。在米六十余年壱千九百〇六年（明治三十九年）から郵便切手ユーズドを蒐集して来ました。……（原文のまま，以下略）」この書き出しではじまる昨年5月16日付け合衆国ワシントン州スポケン Spokane 市から寄せられた京都大学宛ての手紙が発端であった。この手紙によって，文中にもあるように，氏が60余年間働き蜂のようにして収集された総数4,854枚にのぼる珍重な切手コレクションが附属図書館に寄贈されることになった。切手は1853年からはじまる1800年代のもの数百枚をふくめ，第一次世界大戦前後30ケ国に及ぶものが重きをなしている。

第二次大戦時の日本人所持品調査にさいして，紛失をおそれ，紙にベタ張りにしたものを氏自らの手で製本された2冊の切手帳が送られてきたのは6月8日であった。

さらに園田氏からは“Scott's standard postage stamp catalogue”（call number 8-3 S16）が届けられ，また300ドルにのぼる希望図書の寄贈が申し出られた。この申し出に対して図書館学関係の図書を選定し，昨年11月20日，本年4月19日の2回にわたり合計40冊の発注を行ない，氏のご好意による図書はぞくぞく附属図書館に到着し利用を待っている。